新・気仙風土記

千葉俊雄

（上）

はじめに

岩手県南部の海岸沿いに、陸前高田市がある。そこを中心に、北隣の住田町、大船渡市の一部と南隣の気仙沼市の一部地域を気仙地方（地区）と呼ぶ。旧国名は「陸前」。伊達藩の領地で、亡父の故郷でもある。

ここにまつわる幾つかのエピソードを紹介したい。気仙地方の風土、人情をご賢察いただければ、幸いである。

（注、タイトルを「新・気仙風土記」としたのは、一九六七年五月に、金野静一著「気仙風土記」が既に出版されていたからだ。）

一、気仙大工

気仙地方には、船大工や宮大工と呼ばれる、船やお宮を造る高度な技術を持った大工が多い。特に、気仙地方に住む船大工や宮大工を「気仙大工」と呼んでいる。

陸前高田市（現在）小友の船「中吉丸」の船頭、三之丞は気仙大工の血筋を汲み、船人（船員）からの信頼も厚い。また、船人の中にも、気仙大工の血筋を持つ者がいた。

天保十（一八三九）年十一月二五日、中吉丸は、五十集荷物（干物や塩魚等

の荷物。）を積み、常州那珂湊へ向け小友浦を出帆した。

航海十日目、中吉丸は大変な時化に遭った。大きな波が中吉丸を襲う。そこで三之丞は船人に、若布等の軽い荷物から海に捨てるよう、指示を出した。最後に檣を切って，海に投げ捨てた。こうして船の安定を図り、漂流した。

漂流約一ヶ月。中吉丸は太平洋に浮かぶ、とある小さな島へ漂着した。そこは、当時アメリカ領の小笠原、父島だった。

島には、先住民がいた。アメリカ人、セボリー達で、寄港する米英の捕鯨船に、水や食糧などの商いをして、生計を立てていた。

三之丞らはセボリー達に身振り、手振りで「腹がへっている…」「助けてくれ…」と窮状を訴えると、島民達は船を湊へ曳航し、煙草や食事等を持ってきて、世話をしてくれた。

落ち着くと、三之丞らは海藻や魚を捕って生活をした。また、若手の船人三蔵は、三人

で持つ柱を一人で運んだり、他の船人達も島民の家を建てるのを手伝い、気仙大工の本領を発揮した。

こうして三之丞らは、島民達から大変感謝され、二ヶ月後に島を離れる時、島民は手を振って名残を惜しんだという。

ところで、中吉丸が遭難した当時は、鎖国の世。日本を出た者は、厳しい取り調べの上、場合によっては、死罪の掟があった。

しかし、中吉丸が日本に戻ると、荷物を調べられ、父島の様子を訊かれただ

けで、全員が故郷の小友の土を踏む事ができた。それは、幕府が急速に発展している異国の様子を少しでも耳にしたかったからだろう。

後に、幕府は外国奉行、水野忠徳を咸臨丸で小笠原に派遣し、米国政府と領土確認をした際、小笠原が日本に帰属する事がすんなりと決まった。それは、アメリカ側の担当官がセボリーだったからだ。こうして日本とアメリカの絆が深められる事になった。それも、中吉丸の船人達の下働きがあったからだ。

異国との絆深めし野分かな　　俊雄

【参考文献】千葉一栄著「中吉丸の謎」

二、高田松原

二〇一一年三月十一日、東日本大震災の津浪で、高田松原の七万本の松が一本を残すのみとなった話は、よく知られている。十年後の二〇二一年には、市民ボランティアの手で、四万本の松が植えられた。業者でなく、市民の手で松を植えたのは、木を大切にする、如何にも気仙大工の郷らしい話だ。

被災前の松林には、金田一京助が揮毫した、啄木の「いのちなき砂のかなしさよ　さらさらと　握れば指のあひだより落つ」の歌碑があり、何組もの海水客が憩っていた。

やがて、四万本の松が大樹となり、緑陰に津浪前の光景が再び見られるに違いない。

小雪舞ふ津浪だ逃げろてんでんこ　　俊雄

松四万植へて松原海開き　　俊雄

三、千葉周作

同じく被災前、「千葉周作生誕の地」の碑が、陸前高田市を流れる気仙川畔にあった。

周作生誕地の説は他に、気仙地区を含まない気仙沼説や、県南中央部（一関付近。）説等もあるが、私が知り得た範囲では、陸前高田説が有力なようだ。

千葉周作は、北辰一刀流の剣法の創始者だが、この流儀は、「瞬速、心、気、力の一致」。 また、私は、「抜かずの刀」とも聞いている。血気早い幕末の士に、むやみに刀を抜くな、という戒めではないかと思う。

道場は、東京神田のお玉ヶ池にあり、山岡鉄舟や新撰組の山南敬助、伊東甲子太郎などの剣士を輩出している。また、周作の弟、定吉は坂本竜馬を指南している。幕末の剣士を

気仙地区が生んだと言えなくはない。

浅田次郎著「壬生義士伝」では、新撰組に入る為、南部藩を脱藩する藩士が、務めていた藩校の子に、「南部藩は、『石割り桜』を持つ藩だ。桜は石ば割って咲く。（中略）盛岡の子なれば、他に先駆け、あっぱれな花こば咲かせろ。」と激励する。

周作の教えを受けた幕末の剣士も、幕末期という「石」を割り、新たな時代の「花」を咲かせようとした。

（※注、石割り桜とは、花崗岩の割れ目に桜の木の根が入り、割れ目を拡げ、岩から桜の幹がすっぽり出ている。国の天然記念物に指定され、現在は盛岡地方裁判所の構内にある。岩の周囲は、二十一m。樹齢三百六十年のエドヒガンザクラ。）

リアスの小村は、長い日本の歴史の「隠し味」となっていた。話は次回に続ける。

石ば割り花さ咲かせと南部富士　　俊雄

（下）

四、玉山金山

陸前高田市の北の山奥に、玉山金山がある。平安時代には、ここで産出した金が、奥州平泉、中尊寺の金色堂に使われた。

金は重いので米俵に詰め、牛の背の左右に一俵ずつ括り付けて運んだ。それを「俵牛」と呼び、陸前高田の郷土玩具になっている。

なお、渾然と輝く金色堂は、東方見聞録で「ジパングは、建物も道も全て金で覆われている…。」と紹介され、世界の冒険者達を刺激し、大航海時代を迎えた。大航海時代の引き金が、玉山金山だった。とも言える。

但し、伊達藩や南部藩には他にも幾つかの金山があり、そこからも金色堂へ金が運ばれていた。南部牛方節に「田舎なれども南部の国は　西も東も金の山…」と唄われている。またこの付近は、「金」や「金野」姓が多い。

五、気仙語

山浦玄嗣さん（八二才）は、東京で生まれてすぐ、母親の郷里の大船渡に移転し、長く開業医を営んでいる。

山浦さんは、「方言」という言葉を嫌う。方言は、中央（東京）に対して地方という位置づけがあり、地方を低く見ているからだ。

尤もな主張だと思う。この主張は、手に自信を持つ、気仙大工の郷のプライドかと思う。

そこで山浦さんは、気仙地域の言葉を「気仙語」と名付け、新共同訳聖書（日本聖書協会刊）を気仙語に翻訳して、出版した。

例えば、聖書によく出てくる「愛」と言う言葉を気仙の人達が聞くと恥ずかしがるので、「愛」を「大切にする」と訳した。

また、聖書の有名な言葉で、「求めなさい。そうすれば与えられる。…」は、こうだ。

《願って、願って、願い続けろ。そうすれば、貰える。…》

山浦さんはカトリックのクリスチャンで、聖書を翻訳する為に、ギリシャ語を勉強した。気仙の人に合った言葉にして、聖書を読んでもらいたい。というのが、山浦さんの願いだ。

おばんです訛り懐かし盆踊り　俊雄

（【参考文献】

山浦　玄嗣著、「ガリラヤのイェシュウ」

日本聖書協会編、「新共同訳聖書」

重松　清著、「希望の地図」）

六、気仙史話

気仙川での漁業権の争いを紹介する。

この川は鮭、鱒、鮎の宝庫で、高田村と今泉村の両村を通り、東日本大震災で「一本松」となった高田松原へ注いでいる。

古来、この川の主流は高田村を通っていたので、高田村の漁師三十人が二日漁をすれば、次の一日は、今泉村の漁師十六人が漁をするのが慣例だった。

ところが、寛永十六（一六三七）年に、未曾有の大雨で、川筋が今泉村へ変わってしまった。そこで、今泉村は気仙川を占漁すると主張。これに対し、高田村側は、今迄通りを主張。互いに譲らず、流血の惨事を生じた。

これに心を痛めた高田村に住む村上織部道慶は、一日交替を提案し、仲裁するが、双方共聞き入れなかった。そこで道慶は意を決し、「私はこの川で自分の首を切る。首は高田村側に、胴は今泉村側に着くだろう。そうしたら争い事は止めなさい。」と諭した。

道慶が川の中で自分の首を刎ねると、果たして予言通り、首は高田村側に、胴は今泉村側へ着き、村人は水争いをしなくなった。

この話は、市立図書館に史実として保存されている。これは、キリスト教的な自己犠牲の話で、この話が史実として残るくらいだから、気仙地方の人達がいくら恥ずかしがり屋でも、キリスト教を受け入れる余地は多分にある。だからこそ山浦氏が、自分で難解なギリシャ語を勉強してまで、「気仙語訳聖書」を出したのではないか、と推察した。

作家で、僧侶の瀬戸内さんは岩手県民の特性を「視野が広く、おおらか。これは、南部藩は領地が広く、鉄や金等の多くの鉱山を持ち、裕福だったからではないか。」との見解が、どこかの新聞に載っていた。

だが、財政的な余裕があっても、やはり「士農工商」の世。南部藩も伊達藩も農民にはかなり圧政をしていたようだが、記事のような県民性がある事は、頷ける。

鮭争ひ止めろと自己の首刎ねる　　俊雄

七、千葉新次の事

身内の話をするのもどうかと思ったが、伯父千葉新次の事を紹介させていただく。

伯父は、東京で長く教員生活をしていたが、校長と教育観の相違があり、教師を辞し、郷里の陸前高田へ帰り、また教員生活を続けた。　後年、東京の教師辞任は、若気の至り。と述懐していたが、私は大いに共感している。

故郷での教員生活は、小友中学校校長をもって退職。その後は岩手ユネスコ

協会を立ち上げ、ユネスコ活動に専念した。

なお、学生時代に過ごした盛岡では、新渡戸稲造氏の集会に出たり、森戸辰男氏とも面識があった。

そして、ユネスコ活動の一環として、各種学校の「下新田（部落名）ユネスコ生活学園」を創設し、経済的な理由で高校へ進学できない人達に、簿記や和裁、洋裁、和文タイプなどの実技を身につけさせた。また、生徒の経済的負担を考え、当時の国鉄に、通学定期の認可を申請、認可を受けた。

経営は苦しく、正に自転車操業だった。これも、自己犠牲的な気仙地方の血筋だろう。

伯父は、ユネスコ会議の席上、急逝した。

校舎は津浪で跡形もなくなってしまったが、跡地に立って、澄んだ秋の夜空を見上げると、肉眼でも銀漢の瞬きが見られる。

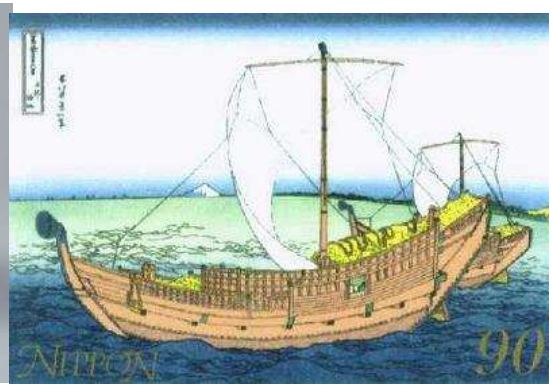
大銀河命棲む星ただ一つ

俊雄

「新・気仙風土記」（上・下）資料

石割り桜（盛岡）

俵牛（陸前高田郷土玩具）



中吉丸（イメージ図）

下新田ユネスコ生活学園校舎（講堂）

４万本の植樹が済んだ高田松原